

試聴会・訪問記掲載

河口無線ハイファイリティ試聴会報告(2016.1.24)

河口無線で開催されたフューレンコーディネイトのオクターブ JUBILEE-MONO-SEの試聴会に行ってきました。

<使用機材>

以下のようなラインアップで計画され、オクターブの社長アンドレアス・ホフマン氏直々のお出ましで試聴会が進行しました。



オクターブ 管球モノラルパワーアンプ JUBILEE-MONO-SE ¥11,880,000 (ペア)



オクターブ 管球プリアンプ JUBILEE-PRE ¥4,320,000



ピエガ スピーカーシステム MASTER-ONE ¥6,264,000 (ペア)



リン アナログプレーヤーシステム アキュレート LP-12 ¥1,134,000



リン ネットワークプレーヤー クライマックス-DS/K ¥2,592,000



ラックスマン SACD プレーヤー D-08u ¥1,188,000

<試聴の経過>



当日のセッティング



JUBILEE-MONO-SE



アンドレアス・ホフマン氏

JUBILEE-MONO-SE は[ディーラーサイト](#)やオーディオ誌上での紹介記事によりますと、KT120 を 8 本使った 4 パラプッシュのアンプで、価格もペアーで 1000 万円を超えるという、上掲の写真のようにスピーカーと比較しても大きさが分かる超弩級のアンプです。こういうアンプは聴いたことがなかったので大いに興味を持って参加しました。

デモはオクターブの別のアンプを使用している関係からオーディオ評論家の山本浩司氏の司会で進行していきました。

最初に JUBILEE-MONO-SE の紹介と前身の JUBILEE-MONO との比較の紹介があり、UBILEE-MONO-SE は KT120 の 4 パラプッシュで 450W、JUBILEE-MONO は 6550 の 4 パラプッシュで 250W ということで、それに合わせてトランスやドライバー段も変更しているとのことでした。

最初に、96KHz24bitWAV のピアノ伴奏の女性ボーカルとドウダメル指揮ロス饗の幻想の配信音源がかかりましたが、音が太くマッシュで迫力がある音がしました。

山本氏とホフマン氏の対話を挟みながら進行していきましたが、設計はどのようなねらい目があるかとか、どうしてペントードに拘るのかというような質問に対し、自然でダイナミックな音をめざしており、ペントードの方がダイナミックレンジが取れて大音量でもピーキーな感じがしないからというような答えがありました。女性ボーカルとオーケストラを聴いた感じでは自然な音ということには疑問が感じられましたが、意味するところは後の経過で理解ができました。また、もともとはパーツメーカーから発展してきているのでトランスなどは自社製造であり、アンプ毎に最適化を行っているとのことでした。山本氏はしなやかな低音という表現を用いたことからフローアから真空管アンプの設計とどういう関係にあるのかといったような主旨の質問があり、これに対してダンピン

グファクターはそれほど大きく取れないが、NFは小さめにしており、電源の安定化などで対応しているという答えでした。

次にバッハのオルガン曲のSACDがかかりましたが、オルガンの最低域までゆうゆうと鳴らし切っていました。

次の曲の前に山本氏も使用している管球プリアンプのJUBILEE-PREの説明がありましたが、バランス出力の設計の都合上、出力段のみは石を使用しているとの説明がありました。この後、ジャズがかかりましたが、とにかく音がずぶとい感じがしました。ここからはアナログに移り、オクターブのフォノモジュールの説明はMMとMC、バランスとアンバランスなどのカスタマイズ仕様を選択できるとのことでした。

アナログ盤は、レイチャールズとカウントベーシー、ライナー指揮シカゴ、ソウルジャズなどがかかりましたが、アナログになってから俄然、ホフマン氏の言う自然なリアリティが感じられるようになり、設計の過程ではほとんどがアナログで試聴していることがよく理解できました。ホフマン氏は音源ではオペラが好きで、設計に際しては声の実在感の表現力を重視しているとのことでした。そこでホフマン氏の持参された開発の時に確認のために聴かれる歌曲のCDがかかりましたが、ソプラノの声の伸びが小気味よく再生されていました。

モニタースピーカーは？との問いに対しては、いろいろなものを使っているが、Isophonがメインであるとのことでした。

ここで再びアナログのジャズに戻り、ついでホフマン氏持参のブルース系のCDで締めくくられましたが、実在感のある音が確認できました。

開発の際は、アナログをテスト音源とし、オペラなどの声を重視し、大音量でも崩れない設計を目指していることから、そういった条件がそろった音源の再生では、威力を発揮するアンプと言えます。そういう意味ではJUBILEE-PREのフォノモジュールは魅力的だと言えます。反面、デジタル系では再生機器や音源の特徴をそのまま出してくるようで、デモの始めの頃のデジタル音源のように自然な実在感から実際の印象が乖離するところもあったように感じました。

以上